

Title	日本吉利支丹宗門史(第三回)
Sub Title	
Author	Pages, Leon(Yoshida, Kogoro) 吉田, 小五郎
Publisher	三田史学会
Publication year	1931
Jtitle	史学 Vol.10, No.4 (1931. 12) ,p.95(649)- 133(687)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19311200-0095

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

日本吉利支丹宗門史（第三回）

第五章 一六〇三年(慶長八年)(註一)

世俗の狀況—秀頼の結婚—内府様公方様となる—彼の巧妙なる政策—太閤様の奉祀—大佛の火災—キリストン宗門の状勢—肥後に於ける迫害—教皇及びエスパニヤ王の補助—年航船の捕獲—日本人と公方様の慈善—フランス・コロニーの人々—アガスチン會の人々—ドミニコ會の人々—肥後に於けるジャン・ミナミ、シモン・タケダ並にその家族の殉教—宗教に關するその他

の細目

初冬の頃、内府様は己が年齢のこと(彼は六十才を越えてゐた。)や、氣候の厳しいことには頓着なく關東から京都に立ち歸つた。それは帝國の當然にして而も正統なる君主たる内裏(Dairi)の手から關白殿(Couambacoudono)や太閤様の位に勝る公方様(Coubosama)の位、即ち將軍の位を受けんが爲であつた。(註二)

一六〇二年九月(慶長七年)十二才になる太閤様の世子秀頼様(Fideyorisama)は、内府様の長男の女、即ち孫女と結婚した(千姫の入輿は慶長七年七月二日)。時に内府様は、幼君に素晴らしい贈物をなし、且つその知行を著しく増した。巧みに取結ばれたその他の縁組によつて、最も強大な人々がこの僭奪者の家族と縁戚になつた。

事であつた。

彼の莫大な富が、又彼の政策を佐けて役だつた。彼の治下に佐渡(Sando)の國で發見された金山銀山は、年々百五十萬クルサード餘(○ポルトガルの貨幣に當る)一クルサードは約三
ラン)彼が所得となつた。彼は往時發見された鑛山又新に發見された鑛山を悉く自領とした。一朝事の起つた場合には、彼は諸侯から莫大な寄進を強請した。かうして各方面から集積された富は、彼の權力をいや増した。

彼は諸侯が舊の君主を深く思ふて忘れぬ所から秀頼様とその母政所様(Mandocorosama)即ち太閤様の第一夫人をいたく優遇した。従つて、彼は屢々親しく大阪に赴いてこの若君の御氣嫌を奉伺した。其上にも彼は、己が權力を害はずして、諸侯の歓心を買はんがために、太閤様を新八幡(nouveau Fatchiman)、即ち軍の神として神列に加へ、以て太閤様の遺功を偲ばんとした。

新奇な神を祀つて建てられた其社は、日本國中最も壯麗なものであつた。人々は花々しい鎮座の式を挙げ、それに毎年執行する祭禮が定められた事は、他の神々と同様であつた。日本人は元來喜捨を好み、祭禮を盛にし、殊に巨費を投じて葬式を營むので、この時には莫大な喜捨が貧民に頒ら與へられた。

公方様は、この著しい例により、更に自らも奉祀せられらん事を思ひたつた。かうした傲慢は、現世に隆々榮えてゐる結果であり、而も之で聖い考は、君主の心中には決して宿らなかつたといふことが知れた。この君主は、最初キリスト教宗門に對して余り好感を持たず、寧ろその反対であつた、と言ひ得られるのであつたが、彼は政治上通商上の利益の點からその世話をした。同時に彼は、坊主共に對して深い憎惡を感じてゐた。

然るに偶像宗(○佛教)は、彼の治下にあつても政所様が無暗に喜捨した結果として、愈々ひろがつて行つた。この夫人と、その子とは舊い寺院を總て復興して新に再建した。彼等は大佛(Daibout)の寺の中に豪奢な廻廊をたてた。太閤様の事業なる釋迦(Chaca)を祀つたこの壯麗なる寺は、京都の中央にそゝりたつてゐた。其處には畸形な

る妖神の偶像があつた。(註三)然るに神は忽ちにしてこの巨大なからくりを取り壊した。既に二三年前、地震の爲、偶像の腹部に龜裂を生じ、破壊した。更に一月十六日(○慶長七年)(註四)火災が起つて、愈々全く破壊して了つた。偶像全體に銅を着せる計畫を立て、ゆが割目に廻り、内側の材木に火が移つて、初めて氣がついた。火は偶像を嘗めつくし、更に三日間續け様に吹いた西風に煽りたてられて、此寺の伽籃全部、隣寺の建物、及び山伏(Yammabousi)の住宅を總て鳥有に歸した。

諸侯がキリスト教門を奉ずる事を禁じた太閤様の命令は、表向廢止されてゐなかつた。併し公方様は、一般のキリストが信じる分には、自由に任せて目を閉ぢて居たが、別に信者側の悪い噂も聞かず、而も巧みに用慎の眼を配つてゐた。自ら耶蘇會の神父の要求には、援助を與へた。イエズス・キリストの教は、彼の領内各地に擴がつた。單に西國に於て特にさうであつたばかりでなく、關東(Couanto)の諸州それから更に東國にも擴がり、それ等の諸州では神の御言の強い靈感

を感じた。信仰といふ生きた礎石の上に建てられた日本の教會は、日に日にその熱心さをいや増して行つた。數々の偉大な例證が、初代のキリスト教徒の徳を思ひ起させる。信者や、殊に坊主共のそれとは似てもつかぬイエズス・キリストの宣教師を見て感心した異教徒は、「神の力こそに在り。」(Digitus Dei est hic)といふを禁じ得なかつた。

一六〇三年(○慶長八年)には、新に一萬人の受洗者があつた。

若干有力な大名が、公然と好意を示してゐた。北方三箇國の領主肥前殿(○前田利長)太閤様の孫にして二箇國を領有せるフクシマ・タイチ(○Fukuchin a Taichi 大輔正之)の如きがそれであつた。この二人の大名の領内には、傳道者の欠乏と財源の不足との爲に、宣教師がゐなかつた。併し毎年その地に傳道する者はあつた。豊前と豊後一部の領主長岡越中殿(○細川忠興)は、己が本城であり常住の地であつた小倉(Cocoura)に、神父一人と神弟一人をおいてゐた。京都の近くでは、越中殿の息子二人、孰れも一國の領主にして、夫人と共に洗禮を受けたが、公方

様故に、それは祕密であつた。筑前の大名は、最も優遇した。多くの大名は、改宗はしなかつたが、放從な生活を止めなかつたといふだけで、眞理に逆ひはなかつた。

當時、日本にゐた耶蘇會の宣教師は、百十九人で、内神父五十三人と神弟六十六人、之が二つの學林、二つの傳道所、十九の駐在所に分れてゐた。年航船がマカオ灣でオランダ人に捕へられた爲宣教師等は、『總てのものに食を與へ給ふ』聖なる神の計畫の前に屈して、著しくが生活費を減じて、主の手から聖貧を實行するの機會を與へられた。なほ辛いことは、生徒の或者を歸し、又嘗ては教會の恩人で、イエズス・キリストの信仰故に自ら進んで謫流に遭つて、全く悲惨に陥つた多數の善良なるキリシタンに援助を續けて行く事の出來ないといふ事であつた。又他の者は、異教徒の領主からは虐待せられ、その租稅は半分も支拂ふ事が出來ず、已むなく子供を奴隸として人手に渡さなければならなかつた。之は永遠につゞく苦しみの種子であつた。兎角する間に、有馬の領主ドン・

ジョン(○有馬)並に大村の領主(○大村)は、殊勝にも神父等を助けて來た。

全市舉つてキリシタンであり、日に隆盛になり行きつゝあつた長崎には、耶蘇會員は僅に三十三人しかゐなかつた。神父等の會堂の他に市内には三つの會堂があつた。祝日には、群衆の集るもの頗る多く、どの門前も暗い中から人が群り集つて來た。日本人達は群をなして説教を聽きに歩きまはり、いたく熱心に懺悔した。キリシタン信者が示した美德の例は、各自用の爲に市中にして來た異教徒に、我々の宗教に對して好感を與へた。されば彼の人々は聖なる靈感に強く心引かれ、やがて改宗を思ひたつに至つた。

學林の附屬として、三人の神父と三人の神弟のるる三つの駐在所があつた。十二の新しい會堂がその附近に建立せられた。長崎から六マイル隔つた所に、聖ローレンス會堂(Saint-Lanrent)があり、その世話は病氣を醫すため神から特權を與へられたアントニヨ(Antoine)といふ老キリシタンに委されたアントニヨ(Antoine)といふ老キリシタンに委

されてゐた。彼は主禱文三度と天使祝詞三度と

を唱へ乍ら聖水を用ひる外には、他に薬といふもの用ひなかつた。

有馬の學林コレジヨウと學院セミナリには、二十人の耶蘇會員がゐた。有馬のドン・ジャンとその夫人ジュヌスタとは、痛く宗教に熱心で、宣教師を助けたこと驚くばかりであつた。

八つの駐在所が有馬の學林に附屬してゐて、其處には、十四人の耶蘇會員が住つてゐた。

主計殿の領地肥後の國には、神父は一人もゐなかつた。併し時に此處を訪れる者があつた。嘗て説教した或キリシタンは、投獄せられた。皆が騒ぐので、彼は釋放されたが、財産は全部沒收された上に、追放されなければならなかつた。もう一人他に棄教した者があつたが、彼は數日後、仕合せにも懺悔することを得て世を去つた。彼は續けざまにイエズスとマリヤの聖名を稱へ、彼が一度背いたこの同じ救世主にお願ひし、苦悶の中にイエズスの御影を見つめてゐた。(註五)

大村の傳道所と駐在所には、十一人の耶蘇會員がゐた。住民は悉くキリシタンで、驚くべき程熱

心であつた。四つの新しい會堂が建てられた。その會堂の一つは、日本に於ける耶蘇會の三つの主要なるものゝ一つであつた。大村のドン・サンセズ(○喜前)は、全力を擧げて宣教師の爲に盡力した。

帝國內で三つの最も古くからのキリシタンの根據地であつた長崎、有馬及び大村の三地方に於ては、宗教は自由で隆盛であつた。司教は平素其處に滯在し、なほ主要なる建物は、之等の地域内にあつた。

聖教は、それらの地方では非常な光彩を放ち、無限の善事を營んでゐた。至聖のサカラメント(Très-Saint-Sacrement)の會、聖母の會、受胎告知の會、並に慈悲の會の諸會は、繁昌してゐた。

二つの學院には、日本人の青年が三百人以上勉強して居た。耶蘇會では同會の費用で同宿(dormirues)、即ち問答師や教會の下僕全部を支へてゐた。その數は夥しく彼等が豊かに養つてゐた貧民を別にして約八百人もあつた。

耶蘇會では、當時教皇によつてあくられた施與をフイリップ三世陛下(Sa Majesté le roi Philippe

III) が印度から差し出された施與の他に財源がなかつた。併しこの二つの補助金も支拂が宜しくなく、或は全然支拂はれない事もあつた。(註六) その金額は支那を通つて送つて來ることになつて居り、教皇グレゴリヨ十三世貌下の許可を得て、年毎に來る船の積荷の資本の中にその一部分加へてあつた。而してグレゴリヨ十三世は、宣教師等が此の如く増加する爲に、必要の限度に於て、僅かな而も不定の財源を出させてゐたのであつた。(註七)

事實時によると、船は姿を見せず、從つて補助金も亦その通りであつた。恰も此年、オランダ人が

マカオの港で船を捕獲した爲、矢張りさうであつた。神父等は、貧苦と陋屋とに交々苦められ、或は又その傳道所や駐在所の大部分を手離して印度に渡り、或は又學院の兒童や教會の下僕に暇を出した。彼等は、只管祈つたところ、神は彼等を救ひ給ふた。彼等はその建物を維持して行く爲には、自分たちは草を食とし、凡ゆる艱難を嘗める覺悟であるた。その間に、彼等は、學院の兒童が最愛の先生に別れたくないとして丸一年間断食するからと

申し出たに拘はらず、親元に返すの已むなきに至つた。

天主は公方様の心まで感動せしめた。公方様は純然たる音物として三百五十兩テヘルを送り、更に別に願ひ出た譯でもないのに、貸金の名目で、新に補助金を與へ、返済の出來るまで、五千兩を提供した。これこそ誠に天の恵みであつた。何となれば、この喜捨とキリスト共の拂つた若干の寄進とで、この年を送る事が出來たからであつた。カトリック陛下の喜捨は、數年支拂はられず、其儘に過ぎた。

マニラのフランシスコ會の管區長として來り、傳道に從來する事二十年なるフライ・デ・ゴ・ベルメオ(Fr. Diego Bermeo)は、この年日本の看察官として遣はされた。彼は八月頃三人の伴侶と共に到着した。彼は同月十五日(○陰曆七月九日)司教に書翰を送り、それと一緒にマニラの大司教の書翰、同會の神父管區長の書翰、耶蘇會の管區長神父デ・ゴ・ガルシャ(P. Diego Garcia)の書翰、並に聖廳の看察官の書翰を送りとゞけた。司教は、漸く十月十

四日（○陰曆九月十日）彼に答へた。それは慈愛をもつてゐるが、暗にクレメント八世の他の親書を確證してゐるグレゴリヨ十三世の親書に違背させるやうな過度の熱心を非認し、又若しも之等の憲法が事實上廢止されたならば、それを疑う動機があつたのであるが、自分は、公式にして權威ある意見を持つことに同意するものであると宣言した。彼はフランシスコ會の宣教師等が會堂を建てたり、説教したり、祕蹟を受けたりすることを見合せ、他の教會の傳道を差控えるやうに勧めてその返事を結んだ（註八）。

フランシスコ會の宣教師も負けてゐないで、大阪と堺（Sacai）の二つの傳道所の根據地に落ちついた。同時に京都に於て、日本人の一キリシタンが誓約を果さんと欲して、以前からあつたものより優れて立派な一つの修道院と會堂とを建立し、更に其處に小かな病院を一つ建てた。

宣教師を求める爲マニラに行つてゐたアウガスチン會の神父デ・ゲヴァラ（P. de Guevara）は、神父エスタシオ・オルチス（P. Estacio Ortiz）をたゞ一人豊後に残しておいたのであつた。他のアウガスチン會の宣教師が踵を接して來り、同會の修道院を澤山建てたのであるが、それは後に記すこととする。

ドニコ會の宣教師等は、船長キザエモン（O Kizzay-mon）の指圖を受けて甑島（Coudgiki）に再びやつて來た。キザエモンは、彼等の爲に小やかな傳道所と一つの禮拜堂とを建てさせたが、その禮拜堂は誠に見すばらしいもので、漸く八ピアストル（Opiastris ピアストルは特に印度支那方面で多く使用せられたる銀貨で、その價は一定せざりき）そこのものであつた。神父等はその地に在つて、いたく長い厳しい冬を、ひどく難儀をして來たのであつた。彼等の食物は、粗末といふも懸な位で、なほ彼等は、彼等の必要に對し、最もよい貧乏人を以つて任じてゐた。何となれば貧乏人は、イエズス・キリストを代表してゐたからである。その間に、この大名は、彼等の美德と、その嚴格な生活の事を知り、彼等に再び或村の所得をあてがう事を望んだ。彼等は年金を受けることを禁じた彼等の教團の規約に違背せぬ爲、これを受けなかつた。時

に大名は彼等の意向に従つて、海上セリュウ離れ、屢々彼等が説教に出かけた本渡に彼等を移すため十二人の漕手をもいた。彼等は最初この助けを借りることを承認したが、他にやりやうのあることを思うて、彼等はそれを退けた。後に至つて彼等は京泊(Kiujomari)の市内に、一つの會堂を立てることを許された。そこで彼等はその工事をはじめ、いづれも傳道に従ひ、又言葉を學んだ。若干の成果が彼等の倦むといふことを知らぬ骨折をなぐさめた。

既述の如く、公方様の方からは何の迫害も起らなかつた。然るに獨立してゐてその領内では絶対であつた諸侯の側では、所々に迫害があつた。

肥後では、主計殿はその首府スマモト(○Soumamでもなく Souは Couにして熊本の誤)市内で再び迫言を始めた。この地には、多數のキリストンがゐて、暴君はそこに掠奪すべき財寶と流すべき血とを見出さなければならなかつた。彼が最初の命令は、キリストンの役人を悉く虐殺せよと言ふのであつた。併し彼は全國の人々の目の前にこのやうな舉に出でて悪評

を浴び、キリストン宗門を奉ずる歴々のゐる政廳に直面して禍の身に及ばんことを恐れて、思ひ止まつた。彼は、寛和にして而も陰險な方便を使つた。これより先六箇月の間、彼はキリストンの財産を沒收し、彼等を市内より追放して荒野に放ち、藁屋根の下で暮さしめ、同郷人をして彼等と商賣をなし、如何なる方法でも彼等を助けることを禁じ、而して彼等に悲惨にして具さに肉體的の困苦を嘗めさせた。告白者の忍耐は、その迫害に打ちかち、彼等を追放した領主を弱らした。之等新なる傳道者達は、各地で、其忠實の證左を見せた。彼等の生きくした説教は、夥しい改宗に効果があつた。

併し、主計殿は、殉教者を出さねばならなかつた。十月彼は其首府熊本(Soumamoto)八代(Yach chiro)及び宇土(Outo)等、領内の要地の巡視を企てた。最初、彼は人口多く商業盛なる都市八代に赴いた。市外のフォムマチ(Fommachi)と稱する所には多數のキリストンなる役人が住つてゐた。主計殿は、この地方の奉行三人、就中フォムマチの乙名^{オフイシエ}計

カクザエモン(○Cacouzaem)に命じ、之等臣下の役人を捕へさせたが、但し市の衰退を慮つて商工の徒は之を不間に附する事とした。かくて彼は旅をつづけた。

領主が信奉してゐた法華宗(Secte Fokke)の一僧は、法華經即ち法の花の書(○Livre Fokkechon, ou 華宗の書乃ち法華經)を土の頭上に載かせよとの命を受けた。

この僧はフォンメオシ(○Fonmehi 星山本妙寺大日本史料十二ノ八に肥後飽田郡中尾村發よ)といひ、十一月二十三日(○陰曆十月)八代に達した。役人等は皆この僧の説教を聽聞に來るやうにといふ通知を受けた。役人等は、その目に何の罪を含まない限りその領主に對する禮から、坊主の説教に出席することを承認したが、かの書物を奉載することは、拒絶する覺悟であつた。此無謀のため、若干の者共は不幸に陥り、形だけの棄教を促すことになつた。十一月二十六日(○陰曆十月三十四日)諸人は、坊主の宅に行き、坊主がその教義を説いたが、儀式に就いては口にしなかつた。翌日、法華經奉載の命令が發せられた。無謀、或は既に唆かされたる或者は、坊主の許に赴いてむれくと沈

没して了つた。彼等の中多くは、未だ確信の足りない改宗者であつた。彼等は心中信仰を守つてゐたが、表面之を見捨て、その魂を失つた。十四人の者は、ジアン・ミナミ・ゴロザエモン(○Jean Minami 崎博士は南五郎左衛門をあて、るられる)シモン・タケダ・ゴヒョウ(註九)ウエ(註九)(○Simon Takenda Gohye 田にあて、姉崎博士は武田にあて、るられる)の影響により、命を奉じなかつた。シモンは、天晴なキリストンであつた。彼は十年前既に洗禮を受けたのであるが、洗禮と共に、神聖なる眞理の實に高遠なる知識と如何にも奇らしい才とを授けられた。されば彼の住つてゐた所では、總べての人々皆之をあらゆる徳の中でも比ぶべきものゝない典型としてゐた。

奉行等は、熱心のあまり、庶民に棄教させようとした。庶民の中三人の者は、之等役人の恨い的であつた。即ちジョアキム・ワタナベ・チロデモン(○Inachim Vatanabe Tirozimone)ジアン・ファットリ・チングロー(○Jean Patorri)並にミダル・ミツイシ・ヒコエモン(○Michel Mitsuhichi Ficoyemore)がそれであつた。彼等は何れもジフィアク(○Jifia'ous)にして、

一六〇一年(○慶長六年)の迫害と宣教師放逐の際には、選ばれて其地の教會を管してゐた。(註一)その才能と學問と慈悲と以て、彼等が町人であつたにも拘はらず、他の生れのいゝキリストよりも尊重された。併し崇高な精神は誠に彼等と共に在り、又諸人は彼等が成就せし精神的徳を悉く云ひ表はす術を知らなかつた。彼等はキリストの人々を信仰の中に支持し、なほその信仰心をいや増さしめ、ついで殉教の覺悟をさせた。彼等は八代の市内方々に分れ、信者に對し、祕蹟に屬することの外、牧師の務を果した。此年、彼等は有馬に行つた。それは宣教師等に自分等のなした事業を報告し、懺悔の水に再び自分を侵されるが爲であつた。この殊勝なる三人のキリストは、彼の信者に通牒を發し、全員一致して、假にも坊主の説教を聞くことからしめた。時に彼等は、ジョアキムの家に集り、主がその赤子を手の中に導いて、最後まで忍んで行く力を授けられん事を願ふ爲、四十時間祈つた。之等のキリストは、約千人あつた。奉行等はかうした集會を懸念し、庶民に對しては

最早無理をいふ事なくその信仰は不間に附した。肥後の三要市、宇土、熊本、及び八代にあつては、この例が棄教者を激勵し、その殆んど全部が立ちかへつた。

併し、十四人の士分の中、十二人はなほ轉び、残つたのは僅に二人の中心人物ジャン・ミナミとシモン・タケダの二人ざりで、何れも屈しなかつた。(註一二)

殊に酷い役目を引受けたカクザエモンは、シモン・ゴヒヨウエの心友であつた。この天神の僕を屈服するといふ望を失つて、(註一三)彼は熊本に行き、其事情を主計殿に具申した。此間に、ミナミは慈悲役ジャンを呼ばしめたが、それは、ジャンが來つて己れと共に聖福音書中に、我主イエズス・キリストの逮捕狀を讀む爲であつた。ジャンは、同僚と一緒に連れだつて信仰の告白者の許に行つた。講讀が終ると、ミナミは三人の慈悲役に心情のこもつた告別をした。間もなく、果して奉行が遣はした家來が来て彼を捕へ、血の氣のない土塊か、まるで屍かのやうにして彼を坊主の家に連れて行き、經文を

奉載させやうとした。ミナミの妻マドレナ (Madeleine) は、兵卒の面前彼に次のやうな殊勝な言葉を

かけた『我が御主様。坊主の家で御身の頭上に經文を戴くことを承諾せぬやうお守り下さい。そんな事になつたら、妾はすぐ出て行きます、永久に妾の夫とは思ひませぬ。お別れします』と彼女は叫んだ。

併しジャンは、かうした激勵の必要はなくこの天晴な妻を慰め、間もなく、心にいつぱいになつてゐた感情を明るみに出した。坊主の門口の

ところで、ヤスダ・ゼンスケ (O Yasuda-Jensuke)
假托安田善助 と稱する奉行の一人が、坊主に對して禮を失せぬやうに注意した。彼は異教の經卷を戴かんよりは、寧ろ百度糞便を頭上に濺がれる方が増しだと答へた。家に入ると、彼は坊主の側に行くことを拒絶したので、坊主は、二度前にのり出して來ると、

ジャンは經文に唾をはきかけた。時に上官はこの信仰の告白者を連れ出した。(註一四)

ミナミは、主計の役人の一人に書翰を送つて、己が信仰を披歴し、又耶蘇會の神父等にも同じく書翰を送つて、忍耐する決心のあるところを報じ

た。

慈悲役のジヨアキムは、司教が當時全部で其數十二人の信者の役人に宛てた一書翰を彼の許に齎した。彼はこの書翰を頭上に奉戴して之を尊び、その様子は如何にも慰められてゐるやうであつた。

扱てカクザエモンは、ジャン及びその儕輩を斬首に處し、その家族はこれを磔刑にすべきの命令を受けた。

其宣告文には次の如くあつた。『即ちミナミ・ゴロザエモン、タケダ・ゴヒヨウエ、此者共は一度轉じて他宗を信ずべき誓詞を出し乍ら、その誓を履行せず、依然吉利支丹たり、故に見せしめの爲、主計の命を以て各其一族と共に斬首に處する者也、十一月七日發令』とあつた。

ゴヒヨウエは、どうしても署名しなかつた。併し最初の迫害があつた時、彼の知らぬ間に、彼に代つて署名した者があつた。ゴロザエモンは、當時他の人々と同じく、自分及び家族の者の生命を助ける爲にふら／＼と署名したが、誰より先に後

悔した。

家族の二人の頭は、熊本につれ行かれて、處刑される事になつてゐた。又他の人々は、八代にて死刑にされる手筈になつてゐた。

カクザエモンは、ジャンを熊本に呼び寄せた。

併し彼は友人シモンを勇士として領主に引き合した。八代に於て刑を受けたこの勇士は習慣により彼の家で己を辯護し、自ら死ぬる前に多くの兵士を殺す事も出來たであらう。併し實は、彼に表沙汰の處刑の侮辱を蒙らせぬ爲であつた。

彼はジャンのねに新しい努力をなし、最後の断案を下す爲に彼は彼をよんで自分と一緒に夕餉と共にした。次いで彼は、彼と別れて、肥後國中で最高の家老ゴロザエモンの許に報告に行つた。

諸人はジャンをゴロザエモンの家に呼び寄せた。かのゴロザエモンは彼に之が最後と無駄の歎願をして見た。時に五人の者は、彼に次の如きことを云つた。『お前、之は殿様の御命令だぞ。』同時に彼等は彼を打つた。ジャンは、イエズスとマリアの御名を稱へつゝ首をのべ、息をひきとつた。

之實に一六〇三年十二月八日(陰曆十一月六日、されど七日さあるより見れば、ミナミの處刑は、上文死刑發令の日附に陽曆十二月九日以後ならざるべからず、)聖母受胎の祝日のことであつた。(註一五)

同日の夕刻、カクザエモンは、舊友に對する死刑の宣告を實行する爲に八代に向けて出發した。彼はいきなり彼を口説き落さんが爲に、百方手を盡して見た。彼は彼の前で終には涙を流し、それからシモンの母ジョアンナ(Joanna)を動かさうとした。併し、ジョアンナもこの計畫に従ふどころでなく、其子と共に死ぬ事を願つた。時にカクザエモンはジョアンナにいつた。『女、其方は何者だ。鬼か、それとも獸か。それを云ふんだ。其方は何者だ。』それから奴隸にするといつて威した。所が、彼女は叫んだ。『妾はイエズス・キリスト様を愛してゐます故、私の一生涯貧しい人につくし、癩病患者の創痕を洗ふことにおつかひ下さればよいものを』シモンの妻イネス(Ines)も亦同じやうな事を叫んだ。こゝに於て、カクザエモンは、出發を保證して旅費を與へて且つ母親と妻は、安全に移住させることを約束し、友が祕かに國を脱走するや

う勧めた。シモンは、之を拒んだ。何となれば逃亡が罪にならないにしても、最後まで踏み止まる決心をしてゐると云つた。併し彼は、宗教の爲神の名譽の爲に死ぬことを幸福と思つてゐた。奉行は愈、涙を流した。シモンは、之程しほらしいこの愛情を知つて、こみ上げてくる感情を自ら抑へる事が出来なかつた。その間にカクザエモンは、乃ち熊本に赴いて、事の顛末を復命し、次いでシモンの清淨無垢の心持に顧慮せず、ピラト (Pilate) のやうに政策のために己が位置を失はぬ爲、義人の死に反対しなかつた。

シモンは慈悲役の敬虔なる會話によつてその魂を強めた。カクザエモンは、眞夜中に再び来て、シモンの所に紙片を認め、其部下の一人イチカワ・ジヒヨーエ (Oitchicaya Jihoye) に命じて、シモンを其家に於て斬首するやうにといふ事であつた。

シモンは寝ずに祈禱してゐた。イチカワを見るや、彼は悦びにあふれた。彼は手紙をとり、読み終るや、其使者に謝し、禮拜所に入つて聖なるイエズスに感謝する爲に、エッケ・ホモ (O Ecce Homo 荆棘の冠を戴)

(キリストの像) の前にひれ伏し、立つて其母と妻とが眠つてゐるのを覺した。彼女等は、浴湯の準備をした。蓋し嚴肅なる儀式の前に當つて豫め其身を清める事になつてゐる日本の習慣に従つたのであつた。

シモンは、適法上の沒收の見地と、その召使にふりかかる疑や搜索を避けんが爲に、家財道具の財産目録を作製させた。

彼は數通の告別状を作り、沐浴をすまし、最も華麗な衣服を纏ひ、かく身を飾つたのは天の結婚式の爲であつた。其時彼は母、妻、並に奴婢に訣別し、其從來の罪惡を許されん事を請ひ、又キリシタン宗門を奉じたる奴婢に對しては、自分の例にならつて堅忍なれと勵まし、且つ各々小やかな贈物をした。イネスは其夫に髪を切る事を願つた。之は日本の婦人にとつては現世を捨てゝ再び他の夫に見えない證であつた。シモンはその必要はないと答へた。彼の母がきかぬため、彼はその妻にこの敬虔な慰安を與へる事を承認した。

ふに、自分は何の取柄もない人間であるに拘はらず、今や殉教者たるの榮を得、現世に於ては、最早なすべき事はないから、天國に行く準備として、共に來て祈禱したいといつた。こゝに於て、シモン・慈悲役、其妻二人及び奴婢等は皆集つていつも告白、^{パーテル}主禱文天使祝詞三度を唱へた。シモンは東の間も一人で祈禱した。とかくする中に、人々は大蠟燭を點じ、行列用の十字架を擔つて嚴肅に殉教の場所に行くの準備をした。

時にシモンは、イネスの手をとつて曰ふに、「今生が今生の別れだ。わしはお前に先だつて行くが、お前が天國に行く道を知らさう。わしはお前の爲に神に祈らう。お前がわしの後を追うて來るのを待つてゐる。それも長い先の事ではなからう。」

慈悲役ミッセルは、第一に主の聖像を捧げて進み、ジョアキムとジャンとは、蠟燭を持つて之に次ぎ、殉教者はその妻と母との手を執つて之につた事は知らなかつた。

從つた。次いで刑吏、三人の他の獄卒及び家の奴婢がその後に續いた。

その場所に於て、シモンが殊の外信心してゐたの前に平伏した。ミッセルは十字架を持ち、彼に向ひ合つて座についた。ジャンとジョアキムは、蠟燭を持つて兩側につき、二人の婦人は少し後に從つた。皆はシモンと共にいづれも膝づいて通常の懺悔と主禱文三回天使祝詞三回を唱へた。此時嘗て信仰を捨てた一卒が來り、殉教者に挨拶をした所、殉教者は彼が懺悔する言質を得た。シモンは、ジョアンナに遺物匣を、イネスに念珠をやつた。愈、最後の而も熱心なオラショが終ると、彼は頸部を下げて首を露はにし、處刑者の前に身を投げ出した。ジョアキムは、自分の方に首が轉がつたので、鄭重に之を拾ひ上げ、自分の頭の上に載せた。

母と妻、この二人の婦人は、超自然の勇氣と信仰を以て、別に涙も流さず、此場の血淒い光景をじつと見つめ、又今の今までぴんくしてゐて今

や殉教者の骸となり果てた此尊敬すべき先導者を
目を離たず見つめてゐた。

母は手を我子の首の上にあき、その顔を撫でつ
ゝ優しく次のやうに云つた。『あゝ仕合事ぢや吾
子よ、そなたは御主様の爲に命を捧げるだけはあ
つた。妾も亦何と仕合せな事ぢや。妾は罪人なが
ら長年大さう愛んで來た一子を天主に献げ申し、
殉教者^{マルチル}の母たることが出來たのだもの。』次にイネ
スが進み出て、この聖きものを拜し、ジョアンナ
に劣らぬ殊勝な振舞を示した。此殉教が行はれた
のは、一六〇三年十二月九日（○慶長八年十一月八日）前數刻
のことであつた。

悲役が彼女等の許に行くと、彼女等は、自分等を
選んでくれと願つた。彼女等は、彼等と共に聖母
の像の前にひれ伏して連禱を唱へた。彼等の様子
彼等の言葉から察して、彼女等の中に聖靈が宿つ
てゐて、其口から發するのだといふ事が良く判つ
た。兵卒さへも、この聖なる言葉に感歎し、キリ
シタンの教には、救濟があることは確かだと告白
した。成程未來の救ひといふことは日本人の中で
絶えざる不安であつた。

イネスは、慈悲役の一人に日本文で書かれた
殉教者傳を幾頁か讀んで欲しいと願つた。彼女は
それに大層慰を受け、熱心に充ちて、自分も彼等
の仲間に入れられんことを懇請した。『大層待ち遠
しい、タツタ半時^{一分半}（○原文は二時間）が隨分おそいやうだ』
と彼女は言つた。

三人の慈悲役は、之等二人の女丈夫の天晴な心
情を知り、此人々に對しては、何の心配もなかつ
たが、彼等はジャンの妻マドレナが矢張りそれ程
立派な覺悟が出來てゐるか否か、氣遣つて居つた。
彼等は行つて彼女を訪問したいと思つてゐた。併
て、ジョンナとイネスは、殉教者たらん事を望んで
ゐたが、未だ其保證を得てゐなかつた。三人の慈

し、番卒がそれを許さなかつた。時にジョアンナ

は手紙をカクザエモンに贈つて、自分とイネスとマドレナが三人共殺されるべきものとしたならば、皆一緒に殺される事が出来るやうに一所にすることを承知するかと問ひ質して見た。奉行は喜んで之を承知し、マドレナを呼びにやつた。

既に轉んでしまつた兵卒共がジョアンナ及びイネスに暇乞に來た。ジョアンナは、彼等に立ちかへるやうに激励し、それを約束した者には、若干の尊い記念品を贈り、又實によく魂にしみ通るやうな忠言を與へた。イネスも同じ事をし、次のやうな立派な言葉を彼等にいつた。

『妾がいろいろち話した事を考へて御覽なさい。あなたの方の言はれる事にも一理はあります。なる程妾は一個の女です。併しこの事をはつきり云つて置きます。私は黙つてはゐられないのです。何故といつて妾を勵し、思ひ切つて妾をしやべらして下さるのは御主様です、で妾が望む時には妾は妾の魂の中に感じる悦びを抑へることが出来ないのです。その悦びは余りに大きくて、遂妾外にあ

ふれ出るのです。』

此の總ての言葉は、最も鋭い表現と共に聖き唇から消えて行つた。尙又後悔の念でいつぱいになつた兵卒等は、此聖き婦人等に天に於て立ちかかる氣力を得るために、自分等を思ひ出されん事を乞うてゐた。而して彼女等は、それを約束した。彼女等は、自家の婢等に暇を告げ、祈禱及び口禱によつて死ぬ準備をした。夜に入つてマドレナはきやうだいの子にして養子に迎へたルイスといふ七八才の幼兒を携へて連れられて行つた。此子供もやはり宣告文の中につらねてあつた。

『いゝ所にいらしつた。何故つて此處から妾達は御一緒に天國に参れますもの。』とジョアンナといネスは彼女にいつた。マドレナはいつた。『で妾、妾もやはりうれしうござります、最早、永久に此世ではお互にち目にかゝれません。でも大したことはありません。妾達は心でも魂でも、イエズスキリスト様に集められて御一緒ですもの。妾は妾の宅で祈つて居りました。そして死ぬ用意もして参りました。でも妾あなた方に感謝いたします。』

妾もお仲間に入れて下さつた御親切に感謝いたします。』マドレナは、大層静かにしてゐた。併し、彼女の魂が悦びで沁みわたつてゐる事は、その様子でわかつた。三人の婦人は、愈、最後のなり行きに對して、共に靜に語り合ひ、神に感謝し、彼女等が受けた不當な恩恵を二人の殉教者のとりなしとした。マドレナは、幼いルイスに、絶え間なくイエズス・マリヤを唱へるやうに言ひ聞かせた。

ところルイスはそれを彼女に約束した。

夜に入ると刑場に行くべきの命令がございた。殉教者達は聖像の前に膝まづいて聲高らかに告白し、クレドとサルヴ・レジナを唱へた。

ジョアンナは説教或は對話をなした。その説教や對話は、そこに居合した人々を感動せしめ、この婦人に語らせ給へる聖なる靈の力の證人たらしめた。彼女は先づ天主に對し罪の赦しを乞ひ、その場に居合せた者には、自分がかうして死ぬのを見て、同情をされないやうに乞うた。何となれば、此死は彼女にとつては天主の法外の恩恵で、慰安と悦びの種子であるからであつた。それで天主そ

のものに話しかけ、附加へた。『御主様妾は御身が妾をどうお考へになつてゐるかわかりません。又どうしてこんなに大きな恩恵を施して下さるのかもわかりません。その上、妾はどうして妾の心持を表はす事が出来るか、なほわかりません。併し御主様今日こそ妾の一人子を犠牲に差上げました。

今度は妾の此身を差し上げます。妾の魂と身の全くの犠牲をお受け下さるやうお願ひ致します。又道徳的の罪を犯してゐる人達にも、後悔して御身の御愛寵を受ける恵を垂れ給はんこと、御身を知らぬ異教徒にキリストianになるべき事を、お命じになるやうお願ひ致します。そして特に主計殿を推薦いたします。妾その方に對して何の不平も抱いては居りません。たゞ御身を信するために、私を十字架につけて下さつた御恩に對しては、私主計殿に大層感謝いたしてゐます。私の唯一つの願ひと申しますのは、主計殿御自身、並に御子孫皆恙なくおられて肥後の國を平和の中にお治めになると、國を擧げてキリストianになること、迫害で轉んだ者が立ち上る事でございます。又來會者

に言つた。『かういふ心持で御一緒にミゼルレを唱へませう。』彼女がそれを始め、居合せたキリストンは、皆彼女に合せてミゼルレを唱へ、主禱文三度、天使祝詞三度を唱へた。

此説教は長く續いて、爲にちそくなつた。法官等は急いでゐた。ジョアンナと他の婦人達は、法官等に人をやつて待つのは都合が悪いであらうが、何しろ事が事で死ぬ用意をしてゐるのであるから、今暫くの間待つて貰ひたいと願つた。かくて彼女が大層晴々しく聲高く連禱を唱へると、他の者皆之に和し、なほ他に種々祈禱を唱へた。之が終むと、彼女は驚く程快活に、『さあ参りませう』といつた。

之等有徳の婦人等は、非常な歡喜を以て出發した。其歡喜は、丁度水晶を透して見えるのと同じく、其顔を透して心の輝きが光り輝いてゐるのが見られ、而も現場の目撃者がそういふのであつた。彼女等は、眞の天使や往來する聖者となつて現れてゐた。それは地上の絞首台ではなく、實に結婚や天國の祝宴にあらはれた。

彼女は、彼女等と共に嘗て其前でシモンが死んだ荆冠のイエズスの像と聖水盤とを持つて來させた。奉行カクザエモンの心やりで三個の乗物が準備されてゐた。何となれば、彼女等は貴族であり、奉行は其友であつたからである。子供は、母の乗物と一緒に乗る手筈になつてゐた。

マドレナは、出發の前に、轉んだキリストンに對して、親切にしてくれるやうに願つた。『さつと時期が來たら、立ち上るでせう。假令あの人達は弱つて罪を犯しても、遂に信仰は失ひませんでした。あの人達が特赦の希望が斥けられる事のないやうに。』

ジョアンナは、エルサレムの道に於ける主の難路に倣はんが爲に、徒步で行く事を望んだが、役人は之を許さなかつた。慈悲役等は、一人宛、各々の乗物の傍について行列に従つた。群衆は無數に集まつて來た。キリストン等は、乗物に近づいて來て、殉教者に天國に行つたら自分等の事を思ひ出して貰ひたい、と頼んだ。彼女等は、乗物を下りて後、蠟燭の點せられてゐる中を荆冠のイエ

ズス像と磔刑の聖像とを拜した。

最初の殉教者は、ジョアンナであつた。彼女は通常の懺悔と主禱文三度と、天使祝詞三度とを唱へ、處刑者に身を投げ出し、主に倣つてものを言つたり祈つたり出来るやう、たゞ喉を少し樂にして貰ひたいと願つた。彼女は數滴の聖水を啜り、十字架に上つて群衆に向つて聲高らかに呼んでいふに『おきゝ下さい。此處に集つてゐられる皆さん、あなた方は月と星とを御覽でせう。併し月も星も、今後は妾共の脚の下になるでせう。考へて

御覽なさい。キリストの教の外に、人の救はれる途はないといふことを。總て他の宗教は暗黒、又盲目に外なりません。心から望みます、あなた方の中、未だ異教を信じてゐられる方は、キリストの教に轉ぜられますやうに。若し一度キリストになつて御覽になれば、妾の言つたことの眞なることがわかりでせう。それから妾は誓ひます。あなた方の中、轉んだ者を後悔させ、立ちかへられんことを。又既に堅く信仰を守つてゐられる方々は、深い根をはり、死ぬまで忍ばれて益々

堅く信仰を守つて下さい。』

彼女がかく語り、群衆に對し天使の如き説教をしてゐる一方、處刑者は、槍を以て彼女をついた。然るに當りがうまく行かず、槍はさゝらなかつた。時に殉教者は、『槍がさゝらない。』と、二度繰り返していひ、又『イエズス様マリヤ様』を二回唱へた。彼女は、最後までイエズスとマリアの聖名を唱へつゝ、己が魂をイエズスとマリアの御手におさめた。

彼女は、イシエ(Oiche)の産にして享年五十五才であつた。

次にマドレナ及び其子ルイスの順番となつた。マドレナは、ジョアンナと同じ祈禱をなし、手荒に十字架に縛られた。彼女は、天主を祝禱した。子供は目にたつた恐怖を感じなかつた。ぎちくに縛られたので、少々繩目をゆるめられん事を願つた。獄卒は、それを見て涙を流し、繩を弛めてやつた。子供は其母の方を向いてゐた。兩人は、互にイエズスとマリアの御名を唱へてゐた事

は、彼等が道々して來た事と同じであつた。こそ、彼等が永遠に歌はんとしてゐた、神の頌歌の得もいはれぬ夜課(マチレス)と初穂であつたのだ！。ルイスは先に突かれたが、槍が貫らなかつた。子供は身動もしないでじつとしてゐた。二度目に突かれて、其殉教を果した。次に母を突いた。左の方の胸を突いたが、初貫き通らず、非常な痛みを興へたに違なかつた。マドレナは相變らずイエズスの御名をよんでゐた。この瞬間に、彼女の頭巾が兩眼を覆うた。すると彼女は叫んで、『天が見えません。』と言つた。併し、間もなく彼女は、息をひきとつて見神に入り、天國に入つた。而して、彼女が地上の困苦を共にし、又いづれも殉教して果てた夫のジヤンにつながつてゐる天であつた。彼女は、ツノクニ(○Tsunocuni 摺津國)の生れで、享年三十三才であつた。幼いルイスは、山城の生れで七八才であつた。

最後に天主の死によつて聖ならしめられたこの木に縛られたイネスの順番が來た。彼女は祈禱を唱へ、自分自身で十字架についた。併し獄卒は、

先の殉教者に感動して、其役を拒絶した。他の人々が志願して犠牲者を高く上げた。彼等は、數回繰り返して突いて見たが、未熟な腕前の爲、イネスは酷い苦痛を受けた。其頭巾は、下つて目をあほひ、息を引きとるまで天を仰ぐことが出来なかつた。彼女は享年三十才イシエ(○Iche 伊勢か)の生れであつた。

此殉教の行はれたのは、一六〇三年十二月九日(十一月八日)の事であつた。

慈悲役達は、極く優しい母の如く、殉教者の兩側に休息してから、此聖なる婦人等の眼を閉し、顔に覆ひをかけ、遺骸を正しく十字架の上に居すまひを直し、その上で其住居に引きとつた。

異教徒さへ、大に感嘆した。又キリストンは兵卒がゐるに拘はらず、懸命に布切や紙をもつて血にひたし、いや着物にまで血をふくませ、翌日は又やつて來て血の染みこんだ土をもつて行つた。

約三十人居つた番人は、シモンが殉教した時、奇怪な光が其家の上に現はれたといふ事を斷言し、又目撃者等は同様の奇蹟が三人の磔刑者にも

あつたと主張し、又強い光が彼等の十字架の上に輝いたと主張した。

司教ルイス・セルケラ閣下は、其概要を認めさせて、之を教皇と王とに提出した。

主計は、丸一年間、殉教者の遺骸を解き離す事を許さなかつた。人には遺骸が落ちかゝるに連れて之を保存し、兼て準備しておいた棺に納めて長崎に送り、其地では耶穌會の學林に移された。併しシモンとジャンの首級を得る事は出来なかつた。

此殉教は、豫てゴヒヨウエの豫言するところであつた。而して司教は、豫言を思ひ出しつゝシモンだと確認した時、彼は殉教者を確證し、殉教者が己自身の血を以て、抹油禮の衣を着てゐるのを見たと、證明した。

之等赫々たる例は、多數の轉宗者を立ちかへらしめ、又この轉宗者は、有馬に行つて聖會に復歸した。シモンの首を刎ね、婦人等の磔刑を執行したイチカワ・ジヒヨウエは、自ら改宗した。之ぞ其職業柄流された血の驚く可き結果ではないか！。日本に於ては、高貴な人の處刑人であるといふ事

程不名譽な仕事はなく、固よりイチカワは、涙あり人間らしい態度を示して來たのであつた。彼は教を受け、洗禮を受けんが爲に、長崎に赴き、神父等にいつた。『閣下、若し私が、宗教の眞諦に就き、かくも細かい質問をしてもお怒りにならぬやう願ひます。何となれば此宗教は、それを告白した者は、其爲に死なねばならぬやうなのです。私はお望次第、死ぬ覺悟をして來ましたから、信仰を持たぬ前に、私が本質的に十全の知識を持つてゐたといふ事は、いはれることです。』

洗禮の日、彼は司教に贈物として、嘗てシモンの首を刎ねた太刀を贈つた。主計は、其年金を取消した。併し彼を重んじて極端な舉には出でなかつた。之等の殉教があつた後、暫くの間、肥後の教會は、平穏無事であつた。併しカクザエモンは、其友シモンの死後、キリンタンを惡むこと愈甚しくなつた。八代の奉行ファビアン・エンスケ(Fabien Vensouke)即ちベトー(Beto)は、キリシタンに好意を寄せてゐた。他は他の人とおき代へられた。主計は、八代に至り、若し其地の貴族并に

を得るといふ外には何もなかつた。

毛利殿は、尙又職人や百姓をも追害した。此大名は、禪宗(Jenchou)(死後は無であり、神佛を何等尊崇しない宗旨の者)ではあつたけれども、總て偶像を拜し、日本には嘗てなかつたブー神(Ole dieu 蟻神さ譯すべきも未考に屬す)まで之を禮拜した。此日本に於ては此哀れむべき大名まで、かくも賤しき偶像を拜するといふ考は誰も持たなかつた。毛利殿は全く、此穢しき虫蠅ムシトボシに對し數個の禮拜所を建てた。

毛利殿の役官、サシヨドノ(O Sacho_{未考})は、往時の會堂と神父等の傳道所に居を構へてゐた。彼は會堂を穢して天罰を蒙ることを恐れ、會堂の周圍に壁を圍らさしめた。併し、彼の妻は、狂人になつた。其頃一人の山伏が、此夫人の身から惡魔を拂つて哀れな奴婢に移した。

領内到る所に、妖怪の出現が頻々としてあつた。時には、此惡魔は狐に化けて家々に忍び、内側から閉めてあるに拘はらず、音をたてゝ門を開け、思ひ切つて力を表はした。所キリシタンばかりは此妖怪を拂ふ力を持つてゐた。

長門の國はづれに有徳なる大名ドン、フランシスコ（○大友義鎮）の女マキゼンスが住んでゐた。彼女は毛利殿の叔父フィデカノ（○Fidecano即ち秀包にして先に藤四郎を出でたる者に同じ）の従弟にして彼女の長子フランセスコの領内に居つた。彼女は攻められたが、後には平和にして放任しておかれた。キリストン等は、未信者の間に在つて、宛も燃えさかる松明、又正義の太陽の如くであつた。

二人の神父と一人の神弟が豊後に傳道した、が固定した駐在所は、持つてゐなかつた。新に改宗する者五百人を算し、又新しい會堂を三つ建てた。筑前（甲斐守の領分）の博多、秋月には二ヶ所の駐在所に四人の耶蘇會員、つまり二人の神父は博多、二人の神父は秋月に居つた。之等の神父等は、筑後を訪問した。筑後の大名は、未信者ではあつたけれども、好意は持つてゐた。最初余り好意を寄せてゐなかつた甲斐守は、其父シメオン官兵衛殿の死後は、がらりと變つた。シメオンの葬式は、この若干の大名に強い感銘を與へた。それで彼は、貧しい人々に葬式の費用として莫大な贈物を

した。彼は、家臣全部にキリストン宗門を奉ずることを許可し、且つ、此教を公然讚美した。然るに彼は、天下の君主を恐れて、自らは、善しとしてゐた宗教を奉じなかつた。故は、己が忍耐の程を疑つてゐたからであつた。此大名の母はキリストンになりたげの様子であつた。

二年前から定められ人口六七千人あつた、豊前の首府小倉にては、長岡（○細川忠興）は、常に好意を寄せた。此町には耶蘇會士三人居る一つの傳道所があつた。四百人の成年受洗者があつた。ドーナ・ガラシャの爲、毎年祭典が執行せられた。本年、祭典後、莫大な布施の外に、領主は其夫人を記念する爲、既に死刑の宣告を受けた者七人の命を助け、翌日は更に二十人の命を助け、彼は之等の不幸な人々を神父の許に遣はして敬意を表さしめた。彼等はいづれも教を受け且つ洗禮を受けた。

長岡の女二人は、キリストンであつた。彼女等は其母の勧めによつて祕密裡に洗禮を受けてゐたのであつた。彼女等は、其父が嚴重な締りをして

ちく爲、いかなる宣教師にも話かけることは出来なかつたが、何れも身を堅く守つて日を送り、天主の靈が彼女等を導き守つて居たといふことであつた。彼女等はキリストンの人々の仲介によつて神父と往来した。長岡は彼女等の生活の完全に於て彼女等がキリストンであるといふことを發見したが、黙認した。

安藝と備後との首府廣島に在つては、福島殿は宣教師等に對し、非常な好意をもつてゐた。

日本の第二の首府大阪は、秀頼の居地であつた。宣教師等は其地で、秀頼の母の従妹信長の女に洗禮を施した。

元丹波の大名内藤飛驒殿の妹ジュリヤ内藤は既述の如く、自ら國を離れてゐた。が終に又大阪に歸つて來た。

京都にては、四箇所の傳道所に十七人の耶蘇會員が居り、上下の京都に二箇所、大阪に一箇所公方様の根據地にして宮殿のある伏見に一箇所あつた。神父モレイオン(P. Moreion)は、神父オルガンチノの代理として學頭となつてゐた。京都は、

偶像の首府であり學校であつた。而して惡魔は、其處に主要なる領分をもつてゐた。

此町の一向宗(Icochous)の人々はといへば、自分等が救濟者と考へてゐる大阪の坊主の近くにゐるといふので、愈々非道の振舞をした。

此間に、キリストンの慈悲は、異教徒を感化すること非常にして、大阪と堺の病院は、宗教の學校となつた。日毎の經驗は、眞面目な心を以てキリストン宗の教義を聞いた者は、終には改宗するに至つたといふ事であつた。權威ある一坊主はいつた『キリストンのいふ事は宜しいが、それを聞かぬ方が更に宜しい』偉大なるホツケシユウ(Fo-tschou)にして新しシシャシヨシユウ(Chachochou)の開祖なるレニイ(O'Ree)の弟子リモン(Rimon)、釋迦の經本に關して新しい解釋の案出者なる此坊主は、日本人のイルマンとの討論を望み、見苦しくも破れた。

京都の一神父は、數右近殿(右近)の舊領ツノクニ(Tsunoconi)を訪問した。信者は、當地に於て叢林中の薔薇の如く異教徒の棘の胸に輝いて見え

た。諸人は、又丹波のキリストを訪問した。更に美濃、尾張、並に京都の北方五日路なる北國の諸國にも出かけた。

其地には、ジエスコ右近殿が千五百人の信者と共にゐた。彼の神父は、彼等の中に六箇月留つた。

北國には三箇所の會堂があつた。一つは肥前殿の(○前田利長)首府加賀の金澤にあり、其地には又一つの駐在所が復興された。それから二つは、ジエスコの領地なる能登にあつた。肥前殿は十人に六人はキリストになつたらしくと言つた。遂に諸人は加賀の北方越前に傳道を試みた。(註一六)

(註一) Mat. Couros. Anna del 1603. Roma, 1608, 80. Glo-

riosa morte. Guerrero, 1604 et 5 (faits de 1603). Aduarte,

I, C. LV. Orfanel. Sicardo. S. Maria. J. de la Concepcion.

T. IV.

(註二) 慶長(Nengo Nei-Tchô)八年、源家康は將軍となり、秀頼は内大臣に任命された。(Ann. des Dairis, Supplement 内裏年表附錄—Ed. de Klaproth)

(註三) 周圍六十七ペルムの薔薇若しくば蓮華の上に、偶像是日本流に座つて脚をくんでゐる。片方の膝から他の膝まで五十ペルム、片方の肩から他の肩まで三十五ペルムあつた。之

によつて他の割合は推察が出来る。諸人は非常な勞をして日本國中から材木を運んで來た。偶像是内部の骨組を有し、表面はウロシ(curochi 漆)と稱するブニベ Vernis 若しくば stuc 漆喰をさせられてゐた。むき出しの腹部は習慣によつて金鍍金された。而して太閤様は、九十九ブル餘の黃金を費つたのであつた。

(註四) 慶長(Deitcho)七年(内裏年表、附錄)

(註五) 一向宗信者の多シタジロ(Tadgiro 田代)に於て、熱烈なる吉利支丹なるレオンは、火災の守神として名高い偶像に捧げらるべき迷信的贈物に寄與することを拒絶した。奉行は彼を召させて死刑の宣告を與へた。レガンは其子女を祝聖することを望んだ。併し其妻は心を動かされず、又全く聖なる考にならなかつた爲、それを拒絕した。彼女は子供の目は死ぬ時普通心を動かれ、父母の心を不安ならしめるであらうといつた。そこでかく聖なる事の爲めに、死ぬ前に子供や妻の形見までに彼にのこしておかなければならなかつた、そして彼が今命を投げ出さうとしてゐるその愛の爲神聖の救世主の外思つてはならぬといつた。レオンは許されて追放された。

(註六) 教皇廳はマドリードの教皇廳公使によつてフィリップの總督に教皇の贈物を傳達せしめた。エスペニヤ王は同じ道を用ひた。吾人は歴史翰林院の文書館に於て、ヴァレンス(Valence)の耶蘇會の學林から來た文書の中に一六〇四年以來教皇の贈物の目録を見出した。其處に、吾人は、一六〇六年には何も送られず、一六〇八年には僅かに千ダカットが見

出され、一六一〇年には二千ダカット、一六一年には千ダカットあるのを認める。後に至つて支拂は幾分規則的になつた。吾人は王の支拂に關しては確かな論據をもつてゐない。

(註七) 年々日本に往く船艦の價値及び實質を記入するのは、神聖なるローマ教皇グレゴリヨ十三世の意見に依り、斯くすれば彼の僧侶等に對し彼等を支持する救濟法を探り又印度のVisoreis 神の許可を得るにも好都合考へた爲である。(譯者曰—此項葡文)

(註八) 此書翰を附錄(第六號)に見よ。

(註九) シモンは享年三十五才であつた。彼は素々大和の生れであつた。ジャンは同年であり山城の京都市内で生れた。

(註一〇) 山城のジョアキムは五十五才にして十年前に洗禮を受け、爾來靈魂の世話に身を捧げて居つた。播磨の室のジャンは三十九才にして十年前に洗禮を受けた。八代のミツシエルは五十才で天性珍らしく善良の人であつた。十五年前にキリストンとなり、爾來殉教を望んでゐた。併しそれほど崇高な庇護は望むことなしに。

(註一一) 諸人は帝國の他地方に於ても同じくさうであつた。

(註一二) 現場目撃者は司教セルケラの面前に於て、聖書の上に之等二人の殉教者の勳功について供述した。細目が司教のそれに同じい第二の談話は代理管區長パエスにより耶穌會の總長に遣はされた。

(註一三) ジャンは判官の間諜にいつた。御身は私の手足の二

十本の爪を抜かれい。それから足の先から頭の先まで私をづた／＼に切られたい。たゞし私は改めないといふことを承知せられたい。

(註一四) イチカワ・ゴヒヨウエといふカクザエモンの主なる召使は南が自ら坊主の許に行つたと信じて、來つて祝詞をのべたところ、告白者は彼に『眞に御身は天より遣はされた天使であるらる、私は屈服しないといふことを諸方に良く知らせ公表するために』といつた。

(註一五) 彼の遺骸は彼の二人の召使によつて埋葬された。その中の一人はキリストンであつた。彼は有馬の耶穌會の傳道所に納められた。

(註一六) 此年、耶穌會では神父ザベリヨによつて洗禮を受けた神弟ギヨーム・ペレイラを失つた。彼は六十六才で僧籍に在ること四十五年日本に在ること四十年であつた。彼は宗教の全生涯を子供の教育に過した。

第六章 一六〇四年(慶長九年)(註一)

内府様の政策——宗門に對する默認——宣教師等の窮乏——教皇への建白書——宗教的實相——寺澤、天草及び志岐にて迫害を加ふ——筑前侯甲斐守、宣教師並にキリストンに對し好意を示す——毛利殿領内に於て迫害を行ふ——メルキヨール豊前殿の勇氣——京都に於ける目覺しき改宗——内府様、宣教師等を保護す——江戸に於けるフランシスコ會の人々——薩摩に於けるドミニコ會の人々——豊

後に於けるアウガスチン會の人々。

愛されると同時に怖られてもゐた(Coub.) 公方の穩健なることと、賢明なる施政のために、日本は平和の中についた。諸侯は各々その財政に心を碎きつゝある際、公方自身は、合法的な策を用ひ、相變らず莫大なる富を蓄積してゐた。但しこれは、

諸侯が專制的にして常にその權力を振つてゐる國にあつては、珍しいことであつた。彼は、近時の發見にかかる幾多豊富なる銀山、就中北方十五リユウ乃至二十リユウの處に位する佐渡(Sando)の島に莫大なる額を得た。同地からは、年々大約百五十萬(クルザード)を産し、之がやがて他の所得と共に畜積されてゐたにも拘はらず、誰一人この君主の富に氣がついてゐる者はなかつた。

内府様は、その間、絶えずその家の永續を計り、機會ある毎に、之を逸せず結婚に依つて有力なる諸侯と相提携した。それは宛も嘗て太閤様がこの策を用ひたのと同様であるが、但し太閤様はその目的を達することが出来なかつた。内府様はその先行者よりも幸運なることを満足に思つてゐた。

尙彼は、愈々確實に人の心を贏ち得んがため、太閤様の制度と名譽とを痛く尊敬してゐるものゝ如くに裝つてゐた。又この年彼は、太閤様の命日に當り、日本にて最も著名なるものゝ一なる祇園の神(Cami-Ghiou)に對すると變らぬ嚴肅にして實に素晴らしい式を京都で舉げた。

この間彼は、夙に秀頼に與へようと思つてゐた代價が、既に秀頼から奪つた帝國とは釣合がそれるないだけは感じてゐた。併し、彼は正統の後繼者が何時かその眠りから覺めるであらうといふことを、思はぬ譯には行かなかつた。一方諸侯は、公方様が終に誓を守る日のあることを念じてゐた。蓋し統治に對する愛着といふものは、勢力が傾くにつれて強くなるものである。而して内府様は、三人の攝政官が秀頼に動かされて自分を除かうと企てたとなし、自らは背誓に心を碎き、計り知れぬ手腕を以て、諸侯、並に秀頼までもこれを使ふことが出來た。

併し、彼は性來温健にして平和を愛し、又宣教師等は慎重に改宗のことや教會の管理に當つてゐ

た。爲に日本のキリストンは、眞の平和を樂しみ、神の御力により數多の改宗者が出來た。この年だけ新に四千五百人の改宗者があつた。諸侯も亦キリストンに保護を加へ、宣教師等の己が領内に居住する者あれば好意を以て迎へた。一六〇四年正月、公方様は神父ロドリゲスに謁を賜はつたのであつた。然るに、京都にゐた異端者なる商人共が商品の品質の事に就きポルトガル人を告發したる廉を以て、公方様は先づ怒り、係りの者を遣はして調査を命じた。當時長崎のキリストンは、愈々祈禱痛悔の度數を増し、ために天主は來つて彼等の救濟に當つた。神父ジヤン・ロドリゲスは、長崎の主だつたキリストンの一人アントニヨ村山(○Antonio Moriyama 村山東安、最初の長崎の代官元禄元年より元和二年まで)を伴つて伏見に君主を訪問し、ポルトガル人、並に市(○長崎)の名に於て、種々なるヨーロッパから持參した贈物を携へて行つた。君主は好意ある態度を示し、又調査の結果を聞いて満足し、寺澤を罷免して長崎の統治を村山其人に任せ、顧問として有力なるキリストン四人を添へた。斯くして寺澤の苛政は、顛覆する事

となり、全町擧げてキリストンであり、且つ又異國人の要港たりし此町は、キリストンなる代官によつて治められ、君主の直轄地となつた。公方様は、神父オルガンチノに對しては聊かの好意も示さなかつたが二時間餘傍にとゞめ置いた。宮庭の重臣の一人にして嘗て宣教師を保護することを約束した上野殿(○Cousoukeidono 本多上野介正純)は、其約を履んで、何時も彼等の辯護をした。

併し、耶蘇會の神父等は、其事業を成就するに當り、宗門の發展する爲に却つて物質的窮乏の爲に苦しんでゐたのであつた。彼等は、エスパニヤの收官から送つて來た教皇の下賜金の外別に補助金といつてはなかつた。(註二) その額は、金貨二千五百エクス餘にして、その大部分は、素とポルトガル王の指定に出で、カトリック陛下の繼承するところであつた(此最後の額の送られたのは何時のことであるか確かなことはわからないが、兎に角王の專斷に出でたものであつて、如何なる成文の法に依つたのでもなかつた)。二千五百エクスの剩餘金といふのは、或る特志家の喜捨を以て買つ

た東印度に於ける屬領の収益であつた。

此總額があれば、神父と神弟、合せて百二十名
それから修學院の生徒と問答師と合せて二百六十
人の費用を辛じて償ふことが出来たであらう。然
るに教會に附屬し何れも慈善事業に従つて居た其
數百六十人の宗俗^{ライク}、即ち適切にいへば、下僕を之
に附加へなければならなかつた。故に全部で九百
人以上の人々を支持し、尙ヨーロッパから日本へ
の旅行費、日本内地の旅行費に宛てなければなら
なかつた。然るに、收入は、種々な理由により、
著しく減ぜられた。教皇^{ザ・サンクトウア}下の下賜金は、數年來
途絶え、又印度から受領すべきものは、支拂はれ
たが、王の役人の支拂つたものは、僅に其一部部
分に過ぎなかつた。

併し諸人は、なほ喜捨によつて得たる相當の額
を有してゐたのであつた。そして彼等は、市民の
仲介によりマカオのポルトガル人が日本との通商
に之を使つて居たのであつた。併し此大切な補助
金も次第に減じ、遂に緊急なる必要に迫られて、
此資本に手をつけなければならなくなつた。更に、

難船の爲なほ之を減じ、又剩餘金は、一六〇三年
のポルトガル船が捕獲された爲、失はれた。一六
〇四年の船も同じく捕獲され、同年、後から來た
船は、僅かに支那の商人から借りた巡察使の救濟
とポルトガル商人の若干の喜捨を積んで來た。

かく宣教師等の窮迫せるため、代理管區長は、
教皇に建白書を奉つた。今日尙保存されて居るこ
の建白書は、(註三) 全くの誠實を以て傳道の眞の
要求を知らしめ、神父等が彼等の資本の一部を通
商の爲に使用せる事を十二分に辯護してゐる。こ
の使用は、之を適切に云へば、投機事業ではなく
して、直接販賣にして常に好相場の絹織物に對し
て彼等の金錢の危険なき有利なる交易であつた。
代理管區長は、日本の國民は、餘り恵まれて居
らず、極く僅かな信者達の寄進は、其大部分宣教
師が自身其生計に供することを餘儀なくしてゐ
た、といふ事を、教皇に報じた。故に宣教師等は、
聖バウロに倣ひ、且つ庶民を更に良く教化する爲
には、特に負擔を重くするといふことは、どうし
ても避けねばならなかつた。

この雄辯なる辯舌は、耶蘇會の慰安の爲になつてゐた。教皇は、勿論この建白書を受納した。彼は、最も遠く離れてゐる宣教師等の正當な要求に同情し、命を發して彼等を救助に遣はした。併し幾もなく、迫害と殉教の試練は、宣教師をして已むなく教皇側からの他の布施即ち、その祈禱の精神的の布施を要求し、もう一人のモーゼの如く、戦の續く限り、運動家が落伍せずして殉教の勝利を得んが爲に、手を天に差し上げたまゝであるやうにしてゐさせようとしてゐた。

一六〇四年日本に居つた耶蘇會員は、百二十三人で、それが一箇所の學林、同じく二箇所の主なる傳道所、一箇所の修練所^{コングレガート}、並に二十箇所の駐在所に分れてゐた。

有馬には、十三人の耶蘇會員がゐた。一人の神父が、四十人の生徒に將來の説教師や問答師に根本的に必要な教育、即ち日本語で書かれた信仰の大意を教へてゐた。アノンシアード會(Congrégation de l'Annonciade)には大層の人數があつた。有馬の大名自身、其領内に於ける總ての會の長で

あつた。(註四)

ドン・アウガスチンの存生中、大層有勢であつた天草、志岐、上津浦のキリストンは、寺澤志摩守の迫害を受けた。志摩守は、肥前の首府唐津(Caratso)に住つてゐた。此狂人じみた異端者は、太閤様が全國に渡つて迫害をした頃、九州の信者を酷く虐待した。當時肥後半分の領主たりし彼は、ドン・アウガスチンの死後、他の半分も己が領土とした。彼は其新しい臣下の者と妥協せんが爲に、最初は、彼等の宗教的自由を尊重した。然るに、二年の間其面前で、之を許さなかつた公方様の不興を買ふと、彼は己が持てるもの全部を沒收せられんことを恐れ、キリストンの破滅を企てゝ偶像に走つた。彼は之等の想像的の神には如何にも愚な誓を立て、其神々の前で、キリストンは決して召使はず、會堂や十字架を破毀し、又全力を擧げて、人々を棄教させるといふことを請合つた。此間に、彼は公方様の寵を回復し、その神々に面目を施した。時に彼は、其約束を果さなければならぬ破目にあつた。彼は堅く信仰を守り、且つ追

放した重臣等を攻撃した。かくて約六十人より成る三家族の者は、悉く、其財産を奪はれて、國を立ち退くのやむなきに至つた。次いで寺澤は、會堂を破却し、十字架を打ち倒させた。彼は天草と志岐の宣教師等の駐在所に接屬せる二箇所の會堂を除き、其他は何れも容赦しなかつた。キリストの悲嘆は、甚だ大きかつた。何れも皆眼を天に向けて、天主に涙を捧げた。併し彼等には一つの精神的の教會が未だ、残つてゐた。即ちそれは彼等の魂の信仰である。而して諸人が此至聖所を攻撃したいと思つた時、惡魔と其手先は、すつかり狼狽した。島人一萬人のキリストの中、小數の者は轉んだが、其他の者は悉く、其不撓不屈なる事驚く程であつた。就中熱心の者は、公然念珠を首にかけて公衆の前に現はれた。宣教師等は唯一日として撓む事なく傳道を繼續し、傳道の爲に招れゝば所の何處たるを問はずはせ參じ、又神弟や問答師を派遣して其事業を擴張した。然るに間もなく、寺澤は、自ら亡命する者あるを豫想して、庶民に不安を興へない事にした。

大村と其駐在所には、十二人の耶蘇會員がゐた。新に二つの會堂が建立された。(註五)長崎にては、學林と修練院^{パラシアート}とに、耶蘇會員は四十二人ゐた。(註六)市内には、耶蘇會の會堂^{レザンス}と無關係な會堂が四つあつた。之は司教の住宅^{レザンス}であつて、時々素晴しく大勢のキリストの會合があつたが、之等の信者は堅信の祕蹟を受けに來るのであつた。

六人の耶蘇會員は、學林^{コレジョ}に附屬した四つの駐在所にゐた。其近くに新に九つの會堂が建立された。(註七)

異端なる婦人が、生み落したばかりの子を殺さうとしてゐた所、或るキリストが、此頑はない子を引き取つて、キリスト宗門を信じてゐる乳母に預けて洗禮を受けさせ養育して貰ひ、其子の命を救ふと同時に魂をも救ふことにした。

肥後守(之即ち主計殿の新しき稱號であつた)の部下で、肥後の奉行カクザエモン(Cacouzayem on)が慈悲役等に對して深い怨を抱いてゐたことは、吾人の既に述べた所である。新に起つた種々

なる事件の爲愈々其怨を増大した。八代の町内にて一偶像の破却せらるゝや、カクザエモンは、キリストンに疑をかけてゐた。然るに日本人の性格は、如何にも高潔にして、若し罪の無い者が他人の犯した罪の罰を受けねばならなかつたら不名譽と信じるといった風であつた。かの大名一家の三人の若い貴族は、自首して出で、大變な御馳走のあつた後でかうした非禮をしてかした事を宣べ、切腹して其罪を償ふと申し出た。カクザエモンは、彼等の罪を赦したが、相變らずキリストンに對しては、遺恨をもつてゐた。一六〇三年(慶長八年)八月キリストンは既に死亡者の爲の異教徒の祭に參列したり、坊主の口にする讚辭バヌイックを聞きに行くことを拒絶した。肥後守の歸著するや、カクザエモンはキリストンの殖えた事を告訴に及んだ。然るに肥後守は、安藝並に備後の領主福島殿(註八)の感化を受けて下々の者に對し寛大の處置をとるやうに勧めた。

併し主計殿は、豫て高潔の士たるイチカワ・ジフ

ヨーベ(Jitthicana Ifioye)にすゝめて偶像宗にしよ

うと思つてゐた所、イチカワは、自ら身を引いて長崎に行き、後にはシヤムに渡つた。(註九)恰もその頃カクザエモンは、三人の慈悲役を捕へさせた。一番初めに捕へられたジャン・インゴロ(Jean Ingoro)は、奉行自身から質問を受けたが其答へやうたるや實に天晴なものであつた。彼は嘆稱すべく一書翰の中に其艱難を自ら物語つた。(註一〇)

ミッセル・ミツイシ(Michel Mizzonichi 第五章に Michel Mizzonichi Ficoyenne にて出たるも)は、精神的の事にかけては他の人達の頭分となつて居り、(註一一)而も熱心に殉教を望んでゐたのであつたが、ジャンにつづいて獄につながれ兩人互に慰め合つた。

ジョアキムは、不在であつた。爲にジョアキムの妻マリアが捕縛された。

時に管區長は、有馬から土着の一キリストンを遣つて、囚人を慰問し、キリストンを激勵させることにした。近くにゐた一神父は、國境に近づいたが、それは慈悲役を助け、その他の信者の告白を聞く爲であつた。

ジョアキムは、長崎から歸つて來たが、多年望んでゐた榮冠を妻に奪はれる事を欲しなかつた。

代理管區長は、彼に身を捨てる前にキリストを慰問し、嬰兒に洗禮を授け、彼の仲間もさうであつたが、彼を疑つたに違ないジャン・ジエモン(Jean Ziyemon)に有益な訓誡を與へるやうに勧めた。次いで彼は、神の恵によつて身を捨てに出かけた。

三人の告白者は、同じ牢の中に一緒に暮してゐた。彼等は孰れも歡喜に満ち、日夜殉教の準備に忙しかつた。

奉行は、死をもつてしても其の囚人には勝てないと知つて、困りぬいてゐた。併し彼は、彼等の財産を沒收し、彼等の子等の名を登録せしめた。之即ち死の前徴であつた。告白者は、かうしてアブラハムの例に倣ひ、此犠牲を天主に捧げた。併し奉行は、漸く此等の子供等を百姓の頭に遣つて、奴隸にする事を思ひ立つた。

八代には、三つの街區があつた。カクザエモンは、ツクノフシ(Tsoucounofauchi)町の住民に棄教を迫つた。然るに彼等は、異口同音に拒絕した。

彼は他の町に行つて二十六人のキリストを集めた。中十三人は、妻や子の愛にひかされて轉んで署名したが、他の十三人は信仰を堅く守つて下らなかつた。此十三人は、牢には入れられなかつたが、三人の囚人の番をしたり、一六〇三年九月磔刑に處せられた四人の人達の十字架を見張したりする役を仰せつかつた。兎角する中にキリストは全部の遺骨を奪ひ去り、シモンやジャンの遺骸と一緒にする爲に、又そつくりしたそのまゝ遺骸を手に入れる事を大層望んでゐたのであつた。然るに彼は、嚴重に見張がついてゐて人々に恐怖を起させる爲、十字架につけた儘にしてあつたが、磔刑者の遺骸は、何時もさうする習はしあつた。故に人々は遺骸の解體して十字架から垂下するにつれ、順次骨を拾ひ集めて、之に一々其名の記してある棺に納め、全部揃ふと此棺を長崎に送つた。十字架上には僅かに衣服の數片が残つてゐるばかりであつた。主計殿の反対命令が出るまで、監督は繼續しなければならなかつた。

信者で通した者十三人の中でパウロ、ヒコザエ

モン (Paul Ficozayemon) とミッシエル (之の職は大工) の二人のキリストは、其署名を偽造されたのであつたが、其事を知り、赴いて抗議を述べ、亡命の道を探つた。

筑前の博多には、四人の宣教師がゐた。此頃までは餘り好意を寄せてゐなかつた甲斐守は、キリストであつた父シモン (高孝) の死を機として、意向を變じた。シモンは宮庭の所在地伏見にて逝去し、遺骸は、博多の教會堂に移して埋葬するやう世子に遺言し、且つ、片身としてこの會堂の事業に充つる爲、千エクス餘の喜捨をしてあつた。葬式はいつも嚴肅に執行せられ、家族の者皆と一緒に其席に連つた甲斐守は、心の底から感激した。何故といつて異教徒の葬式は、其壯嚴さ人の心をそゝる事に於て、及びもつかぬものであつたからである。甲斐守は、神父に感謝の意を表し、度々彼等と食事を共にする事を望んだ。彼は進んで米千俵を喜捨し、其家臣は總て、改宗してキリストとして生活して行くことを許可した。この年秋月、博多其他の地方に於て約八百人の成年に授洗

する事が出來た。甲斐守の叔父惣右衛門 (○直) は、安藝の廣島に宣教師等の建物を得させた。

豊前的小倉 (Cocoura) には、三人の宣教師がゐた。漸く二年前出來たばかりで、而も既に七千戸もあつた此町には、四百人の成年が洗禮を受けた。この町のキリストは、支那船の難破が不意に宣教師を見捨てはせぬかと恐れ、彼等の爲に米六百俵の喜捨を集めめた。

陰曆七月十七日 (○陽曆八月十二日) はにドーナ・ガラシャの記念祭が執行された。この機會に越中殿 (忠興) は、素晴らしい慈善を行つた。彼は死刑の宣告を受けたる者七人を特赦して之を神父に引渡し、なほ之を以て足らずとなし、その翌日、更に他の死刑の宣告を受けたる者二十人を悉く釋放した。教會の恩を忘れぬ之等憐れな人々は、説教を聽かん事を希ひ、且つ洗禮を受けた。越中殿もキリストになりたげな様子であつた。併し政治的の利害關係と第六戒 (○貞節) を守る事の困難とが、この大名の改宗には何時も防害となつた。

安藝と備後二州の首府廣島は、福島殿の好意に

依り再び根據地となつた。この大名は、如何にも好都合にして立派な建物のついてゐる敷地を寄進した。其養子フオケドノ（○Fokedono 宗の子八助を迎へて世嗣となす 福島正則は別所重刑部少輔正之之なり、フオケドノ）は、基督教の眞理は之は八助殿のなまりたるものならん）は、基督教の眞理は之を納得したと口にしてゐたが、未だ思ひ切つて改宗するには至らなかつた。この地方の人々は、神を篤く信じてゐた。其社殿は、廣島の近くに在つて五百年前清盛（Tchidgiomoni）といふ著名な一人物に依つて川の島（une île du fleure）の中に建てられたものであつた。一年に五回此處に大巡禮する者があり、又素晴らしい市が立つた。

一神父は廣島を發して山口のキリスト教を訪問した。この信者の中には聖フランシスコ・ザビエ（○Sainte-François-Xavier 三成）や神父デ・トルレス（P. de Torres）の滯留した頃、洗禮を受けた老人も若干交つてゐた。この地方のキリスト教を維持して最も力のあつたのは、ベルシオール豊前殿（○Belchior Bougendons 熊谷）であつて、彼は嘗て毛利殿の領國の總奉行サンエン殿（○Sachendono 佐瀬長門守元嘉 大日本史料十二ノ三による）に對して驚く可き氣力を示した。この大名は、ベルシオールと會食中、

キリスト教を悪ざまにいひ、著名な大名は一人として告白するを欲せず、又この教を奉じたる大名は一人としてその終を全うしたる者なく、アウガスチンの如き、豊後の大名（○大友氏）其他の如き皆それであるといつた。ベルシオールは、基督教の爲に辯護し、又この例に對して毛利殿の例を引き、その神を敬ふ事篤きに拘はらず、その禍を防ぎおほせなかつた事を說き、又坊主安國寺（○Ancasō 惠瓊）治部少輔（○石田三成）その他數多の例を引いた。時に、サシエンドノは、之を聞いて無禮の返答をした爲に、ベルシオールは、短刀を手にするを禁じ得なかつた。サシエンドノは、時に食卓を立ち、退かんとした。サシエンドノは、時に食卓を立ち、退かんとして何か禍が起るところであつたのを、時にベルシオールは立つてその粗忽を陳謝した。併しキリスト教の信仰は決して放棄しないといふことを證せんが爲に、『併し余がキリスト教たるを以て余の生命を奪はるゝは、御身の勝手である』といつて、彼は臆せずその首を差しのべた。サシエンドノは、心を和らげ、今後は宗教の事に就てベルシオールに心配をかけない、と約束した。

間もなく毛利殿は、政廳より歸り、イエズス・キリストに對する怒は再び燒え、その領内からキリストの名を根絶せんと欲し、先づ他のキリスト全體の頭にして擁護者たるベルシオールから手をつけようと決心した。彼はベルシオールにその宗教を棄て、祖先の宗教に立ち歸るやう嚴命した。ベルシオールは他の事なら何なりと領主の命に従ふが、信仰を捨てる位なら命を捨てると答へ、若し領主が處刑せんとの希望ならば、先づ、動物の屠殺者、即ち賤民をして山口の町中を三回引きづり廻らせて屈辱を與へるやう宣告されんことを乞ふた。之に反して諸人は、この懲罰はキリストといふ稱呼に對して課せられたのである、と公言して居つた。(註一)又その決心を毛利殿に確實に傳へられんが爲、彼は實に美しい書翰をその友人等に遣つて、領主に之を傳へられんことを乞ふた。(註二)毛利殿は、更にベルシオールを説伏せんとして他に種々畫策する所があつたが、終にその儘になつてしまつた。

毛利殿は、並外れた迷信を抱いてゐたばかりに

キリスト宗門に對してかく余り熱中しなかつた。彼はあらゆる宗旨の保護者となり、あらゆる偶像を禮拜した。坊主共は、この迷信を煽動し、領主の迷につけ込んで搾取した喜捨によつて生活してゐた。

毛利殿の重役(リュウトナン)、サシエンドノは、その山口の屋形を領主に貸して、日本の傳道の搖籃たる神父等の元の傳道所に行つて住んだ。彼は、又禮拜堂の冒瀆されることを恐れて、之に垣を廻らし、天罰を身に受けなかつた。併し乍ら、その夫人は、惡魔にとりつかれた。かくて妖術者共は、彼が宣教師等の家に住つた爲、この禍が起つたのであると彼にいつた。サシエンドノは萩(Banqui)の屋形(ヤカタ)が出來次第、其處を立ち退く決心をした。(註一四)

二名の神父と一名の神弟が、豊後に赴いて傳道に從ひ、成年者五百四十人に授洗し若干の會堂を建てた。

都には神父六名と神弟十一名都合十七名の耶穌會員が住つてゐた。三國の領主たる肥前殿の姉妹も、受洗を望んでゐた貴族の一人であつた。この

婦人は、嘗て一箇國を領有し、今は亡命の身の一大名（○宇喜田秀家）の夫人であつた。彼女は、既述せるジュリヤ内藤から道を聞かされてゐた他の多數の人々と同じく、慎重の余り受洗を延してゐた。洗禮を受けた者の中には、太閤様の未亡人政所様（Mando Cossama）の孫で、ピエール（Pierre 木下勝俊）といふ名を授けられ、爾來人の龜となる生活をしてゐた者や、秀賴の生母の身内に當る信長の女がゐた。その夫は、既に二三年前に洗禮を受けてゐた。

秀賴自身は、神父等を非常に優遇した。一日世界地圖と太陽と月との運行を説明するやうに出來てゐる渾天儀を持參せしめ、この機會に、之等の機械に就き、一人の坊主に質問した所、愚劣なる答を得たるのみであつたので、神弟に説明を求めた。かくて彼のその道理を良として、坊主共の傲慢と無智とを責め、彼の驚嘆に價する天體の運行と與へられた賢明なる説明とに非常に満足した。斯くて宣教師等は、人文科學の力によつて、宗教的眞理への諸の原理を開いて行つた。

神父一名神弟一名とで北國のキリスト教を訪問

し、八十人の成年者に洗禮を授け、その中には諸宗の學問に深く精通した一坊主があつて、彼は靈魂の不滅を納得したその日、始めて心の平和を味つた。肥前殿自身はキリスト教を奉じてゐる臣下の者には、その本分を盡すべきを勧め、キリストンの教は、全然この教に身を投げ出すに至らない者でも之を知り實行する價値があると確心を持つていひ切り、この教を稱讃し、尙ほその家臣の半ば以上は、洗禮を受ける氣になつてゐると附け加へた。この大名の夫人の一人は、キリストンになる計畫をしたまゝこらへて來て、日曜祝日を守り断食をなし、祈禱をし苦行をし何より先に靈魂の救濟に心を打ち込んで、生活に於ては、キリストンそのままの行動をしてゐた。天主が彼に慈悲を垂れることを望む大いなる理由があつた。肥前殿は、信長の女なるその正室にキリスト教になる約束をしたものと人々は信じてゐた。この大名の非常なる好意により、代理管區長は、肥前殿の首府にしてジエスト右近殿の住んでゐた加賀の國の首府に、一駐在所を建てる決心をした。一神父が一神

弟と共に遣はれて、途中、越前(Yetchigen)のキリストンを訪問した。(註一五)

薩摩に僅かに一時的の根據地を有してゐたのみであつたドミニコ會員等は、この年増援を受けた。

神父ジャン・デ・サン・トマス(P. Jean de Saint-Thomas)の代りとしてフイリップ・ピノ群島の管區長神父ムゲル・デ・サン・ヒアシンヌ(P. Miguel de Sainte-Hyacinthe)の選舉の僧會に於て、諸人は聖ロザリヨ教區の中に薩摩の王國のノートル・ダーム・デ・ロザリヨの傳道所を編入した。間もなく神父ジャン・デルエダ(P. Jean de Rueda)が日本に派遣された。

一六〇四年十月三十一日(○慶長九年九月九日)マニラのアウガスチン會の教區により開催された中間聖省に於て、豊後のエスピリツサントの修院長は、稱號を投票權とを受け、又神弟オルチス(Fr. Ortiz)は修院長の資格を以て選ばれ、又修道院を同國に建てよ、との命令を受けた。間もなく、彼は神父ペドロ・デ・オロツコ(P. Pedro de Orozco)並に宗俗

神弟デエゴ・ペーナ(Fr. Deigo Perena)相伴ひて日本に渡つた。彼は取敢えず、田杵(Ousouki)の市内に第一の會堂建立に着手し、之をカッセブシヨン・ム・ノーベル・ダームに奉獻した。

(註一) Gio. Rodriguez Giram. Annua di 1604 (23 di novembre 1604). Roma 1608. 8°. Guerreiro. Relacan... de 1604 e 1605 (faits de 1604). Aduarte, I, I, c. 58. S. Maria.

Sicardo, I, I, c. 7. Juan de la Concepcion, t. IV

(註二) 教皇特派公使が交附した借用證の一例一六〇四年の分の翻譯を附する。ナムする、附錄七。

(註三) 附錄八。

(註四) 五箇所の駐在所が有馬の學林に附屬してゐた。領内全部で二百三十人の新しい受洗者があつた。

(註五) 外國人で洗禮を受けた者二百二十五人あつた。

(註六) 外國人の受禮者が七百人あつた。

(註七) 彼等は成年者二百二十四人に授洗した。一神父は五島

を訪れて、成年者百三十人に洗禮を受けた。

(註八) 福島殿は、彼に他の諸大名がキリストンの教を良しあし、合理的であるとして、之を信じる事を許して、干渉しなかつたさういふ穩健にして人情味のある一般の風に反してキリストン教徒の血を流させたり(彼は六人の殉教者にそれなく死した)慘酷な迫害を加へる事は位置からいつても其性格からしても堪えない事であるとしてゐた。(Ann. de I

605, p. 213.)

(註九) 當時、支那、マニラ、交趾支那といふやうなアジアの重要寄港地の大部分には、日本の小さな殖民地があつた。

(註一〇) 附錄第九。

(註一一) 彼は「聖人物語」や其他若干の聖教書類を日本語に翻譯した。

(註一二) 諸人は、此耻辱を最も大罪ありと認定された下層社會にのみ負はせた。ベルシオールは、我主の受難を憧憬して之を望んで居つた。

(註一三) 附錄一〇。

(註一四) 神父は全村悉くキリスト教徒たるシブキ(柴福 Chibouki)を訪問する爲山口から十リコウ山間に分け入つた。

(註一五) 此年耶蘇會では三人の神弟を失つた。其中には俗の傳道助手、神弟バルトロメイ・デ・マシヨルク(Fr. Bartolomeo Redondo de Majorque)がゐた。彼は耶蘇會員たる事三十七年、又日本在留二十七年に及んだ。

(附記) 第五章を翻譯するに當つて、大日本史料第十二編中の諸方に散見する抄譯を参考としたる處多し。記して感謝の意を表す)

レオン・バジス著

吉田小五郎譯